

昭和八年九月十日

(日七廿月八年和昭可認物便郵種三第)

(一) 第二十二號

「暮婚晨告別。無乃太忽忙。」  
とひときい杜甫の怨訴を吾人  
ば縣教育會長の此頃の椅子の  
動搖に感する、何故なれば最  
近二箇年足らずに四迭、短き  
は半歳、長きも一年、暮婚晨  
別も其の激しい忽忙ありにあ  
きれるを得ないのである、然り而して「暮婚晨別民之不  
幸。非上之過邪。」とは是又我  
山縣三郎氏は昨年九月、外  
山務部長の後を襲うて來任  
し、この八月山形縣内務部長  
に榮轉せられた、本縣として  
は二人の名部長を前後相接い  
て同じ山形にさらはれた事に  
外山氏を失つた當時は誰も  
が胸に語りあつた後任者は、  
少なくとも偏執な感情家であ  
りたくない事であつた。然る  
に山縣氏を驛頭に迎へた翌日  
と、不豫子、欣々然として  
外山に語りあつた後任者は、  
だぞと、聽く者掌を拍つて善  
哉を歎呼した。善哉も讀めたこと  
ではない。

官吏は官吏臭さが故に威儀

ある者と思ふに、世間に官僚

諭者、人不肯從、以躬行率者

ある、平山の武者所や、先陣

病根此に久しく、從つて上下

の親和疎通を阻害し、之れが

ため事業の發展が妨げられて

所謂官僚式に考へ來つてをる

病根此に久しく、從つて上下

# 青年男女學生と宗教的教育

神奈川県立第一高等女學校長

船越文敬

あらゆる方面に鬭争氣分の横溢して居る現今社会に、融和一體の生活を強調する宗教の氣分を取り入れたいと云ふ希望は、近來大分濃厚になつて來た。殊に青年男女の教育に、宗教的陶冶の緊要を叫ぶ者が日增多くなつて來た。併し縁なき衆生は度し難いし、どんな結構な御馳走であつても、お客様がそれを嫌ひであつたり、食べて呉れる意志がないかたりするのでは、折角の御馳走も何の用をなさないと同様に、宗教的陶冶の場合もそれを受け入れる者に、受け入れる意志のない際には、折

角の骨折も徒勞に屬することになる。一體今の青年男女學生は、宗教に對しどんな考を持つて居るだらうか。宗教に對してどんな態度を取つて居るだらうか、かう云ふ問題を一瞥して置くことは、青年を宗教的に陶冶しようとする人達に、極めて必要なことではあるまいか。

今から廿年前に、全國各地の中學校卅校の生徒約一千五百名に「宗教は必要なりや否や」と云ふ簡単な問題を出して、解答を書いて貰つたことがあるが、其の解答を整理し

●必要なりと云ふ者約六割  
●不要なりと云ふ者約二割

△弊害多い故(一五)へ忠君と云ふ歩合であつた。又何故に必要であるかの理由と、その理由を書いた者の數を列舉すると左記の如くであつた。

△善行をなさしめる故に、宗敎は必要なりと云ふ者約二割

△確信を與へる故に、宗敎は必要なりと云ふ者約二割

△慰藉を與へる故に、宗敎は不可△宗教家の手を離れた民衆の宗教が必要△青年人には必要なし△生れ

△愛國の心があれば澤山(一五)居るし、中學校の修身教科書に、大瀬博士の書いた教科書の如きは、神道儒教佛教基督の如きで、その結果は左記の如くである。

## 川縣女教員會を思ふ

女教員隨錄

中郡曾屋小學校

原モト

姪婦は五ヶ月前から醫師と産婆の診察を受けて、胎兒の居なりを直し、異状分娩のない様に、毎月一二回の按腹をほどこし、腹帶を確かり締めて静かに安産を祈りつゝ臨月の至るを待つのが常でせう。さて先年の神奈川縣女教員會紛糾問題は、全く誤診と産前手當の不用意とが因をなして流產におはつた事は胎兒にとっての第一の不幸とする處でありました。いざ出産となれば確かりした助産婦は細心の注意を以て胎兒の居なりを直ほしながら産婦を助けて行くのが任務です。その人がなかつた事も第二の不幸でありました。

申す迄も御座いません。

船越文敬

敬

神奈川

女教員會

を思ふ

モト

原



## 國民革命中の獨逸より

ギーセンにて  
村上瑚磨雄

けすくて、なた當時に、小学校などでも子供同志政黨争をやる事は珍しくなかつたが、此の節になつてはまるでヒトラー黨の天下、ヒの徽章を襟につけてゐる以上にはまるで幅の利かない有様となつてしまつた。事實共産黨は手も足も出ないままで、家宅搜索、検束、拘禁の憂目を見て、中にはいさぎよく(?)ヒトラー黨に變節するものさへ出て来る有様となつた。有爲轉變の世の中とはいひながら、今更にそぞろ無常を感じざるを得ないものがある。

かうしたヒトラー黨の活動隊の第一線に立つて働く「突撃隊」の苦心もなかなかのものである。その内でカーキ色のシャツを上着がはりに着て同色の帽子を被つてゐるのが SA と呼ばれる一團で、その大部分は青年である。その中から更に精銳が抜かれて SS と呼ばれる一團を形成する。これは黒シャツ黒帽子である SA も SS も、共に規律ある軍隊式の訓練を受けてゐるので、武器さへ持たせれば今日からでも一人前の兵隊になれのだから、おまけにそれが全國に亘つて幾十萬人とあるのであるから、流石にお隣のフランスあたりが頭痛に病むのに無理もない。おまけにもつと年少の童兒を糾合してはヒトラー少年團まで作られてゐる。英國仕入れのボーリスカウト——日本の少年團、獨逸では、開拓者團と呼ぶ——が近頃ヒトラー政府から睨まれて來だしたもの、一寸注目に値するものがある。處で當のヒトラー先生、フランスの文句などにはおかまひなしに SA や SS の仲間から、一粒選りに選りぬいた上で——おまけに新政府に握手した「鋼兜黨」からも——「補助警官」に任用して、ピストルを持たせて、夕方の七時から朝の七時まで勤務をさせる事を實行した。當地の如き人口約四萬の都會で、平生警官が約七十人常備されて居り、おまけに歩兵三個中隊機關銃隊一個中隊を有する處へ、百數十人の

無産黨について目をつけられたのが「社會民主黨」共一つ穴の狸と睨まれてゐることは、國外にて行くもの、途中でつまらぬもの、拘禁されるもの、捜索を受けるもの甚しき殺するものまで出て來てくれるもまた秋風落葉の感とするものがある。

政變と共に起つた問題は、已公吏教職員の異同」といは寧ろ、反對政黨である社會民主黨の盛時に羽翼をなすやつてゐた連中は、あの職首罷免乃至轉任で辭令一枚で、ボツンボツン首をチヨンぎられてしまふ。教育界の異同はまだをさす、毎日の新聞は、そのを以て少くとも一頁を満たしてゐる。本人の内意を聞くなんといふ様な事を聞かれてゐる。抜く手もあざやかな職首振であるとしてゐる當市の市長イツシヤー君、氣の毒に四年計画ではとてもやれぬ。抜く手もあざやかな職首振であるとしてまた筆意にしてゐる當市の市長と、留守中に免職の辭令を以てゐるといふ始末、詳しいことは分からぬが、何で人々が社會民主黨に於けさせをすませて家に歸つてしまふ。士である。かうした悲劇がまださっぱり分からぬので困つてゐる處です。人は溫良恭儉讓、孔子様に見る様なそしてまた筆士である。かうした悲劇がまださっぱり分からぬので困つてゐる處です。し革命にも不拘幸に命だ無事に保つてゐますからりますか」と聞くと「それがまださっぱり分からぬので困つてゐる處です。」

ヒトラー政府の鋒先は、元々に轉じてその持論たる、猶太人征伐にと向けられた。これはまたなかなかやり方が峻である。獨逸人よ、獨逸人商店で買へ！」の標語を掲げ、顧客の足も次第に遠のく様になる。處がヒトラー政になつてから、不安を感じ、國外に逃げ出した猶太人、は獨逸以外に住む猶太人、わけてもアメリカ在住の猶太人などの宣傳からヒトラーの府の猶太人虐待といふ標題で、盛に諸外國の新聞が新政府の撃の記事を掲げ出した。現アメリカの某繪入雑誌は「セセン市の猶太人虐殺」などと見出しをつけて、ラーンの流れは猶太人の死體で水へせかれてしまひ、ヴィーセー頃出たか知らないが、これにク川にも、五六十の猶太人屍が浮んでゐる云々などと書いたのである。日本では新聞には、どんな記事がそりにとの事で、自分などもお接猶太人に危害を加へる様子は、政府の布達で固く禁ぜられてゐるので、そんな事は断じてない。外國人に對しては、特別に慎重な態度を執る様に、いよいよ全獨逸國に亘りで経つてもさういふ猶太人至の悪宣傳が外國で止まないで、新政府は、諸外國に對しては、嚴重に抗議を發すると同時に、いよいよ全獨逸國に亘りで、猶太人商店に對するボム

は、SAASSの連中をまことに對して、獨逸人の店へ入るに手荒な事などはないで、SAASSを猶太人の店の店であるから、と注意した。入口に立たせて、買物に來連中に對して、獨逸人の店へ買ふ様に、この店は猶太人の店であるから、と注意した。ふた様である、大抵のお客そんな事に頓着なく、ズボン買物に這入つて行くもの、あつたが、SAASSは、そをまでも差止めはしなかつた。朝の十時から夕七時まで、SAASSの連中張番をされではあまりいい

ふ。猶太人の店は大きいのが多めで、百貨店並に均一販賣店も珍しくはない。一方で、小賣店の救済をしようといふのが、やがて又ヒトラー黨の政策の一端のだから、そしてさういふ資本を擁する店は大抵猶太系であるから、いよいよ以てたまらない譯である。

新政府が力瘤を入れてかかってゐる教育政策が、やがて又猶太人征伐と大關係がある一體一口に獨逸の教育はあるあだとかうだとかいふことをこれまでよく日本で耳にしたものであるが、こちらに来て實際を見るところまで獨逸の國としてキチンと日本のそれの様に國內に一貫した制度などはありはしないのである。

早い話が、師範教育について見ても、獨逸は早く在來の師範學校を廢して、師範大學にしてしまつた様に、日本では誰もが考へてゐるのであるが、何ぞ知らん今日尙依然として、ハイエルンとヴュルテンボンベルグとはそのまゝの形で師範學校が嚴然として残つてゐるといふ次第である。これはホンの一例に過ぎないが、他の諸學校の修業年限にして見ても州によつてかなり區々であり、教科書の如きは、各校それぞれちがつたものを用ひてゐる處さへある。小川で受けた教員免許狀は「ベツセン州」では通用しない。「獨逸の學校教育の實狀を見るに」とか「最近の獨逸の教育の主潮は云々」などと、一口に云ひ切つてしまふ事は、ほど大きい膽の持主でなくしては一寸やれない事であるといふことを、自分はつくづく考へさせられた。何事にも統一を主として企てられてゐる日本の教育制度に馴れた目で以て獨逸の教育を見ると、それこそまるでマチマチな混亂そのものとの様な感じを持たずにはゐられない。(つづく)

# 縣立高女校母の會主催 母心の社會的進出

山田わか子女史講演

(記文責)

即ち人の生命線は女性によつて維持されて居る。この重大使命を果すべく女性として生れて來たのであるこゝに思ひ至りました時、私は非常に女性としての光榮を感じたのであります、而して我々の経済生活はこの生命の延長のためにあるのだ、金のために人間が存在して居るのではない、人間のために金が存在して居るのだ、と云ふことをはつきりと認識したのであります。外に出てお金を儲けてくれる男性の仕事も大切なことであります。が、人間生活の中 心であり根幹を爲して居るのは、生命を育み護る所の家庭生活にあると思ふのであります。もつと言葉を強くして言ひますと、この生命線を維持し行く爲めに男性の存在を必要とするのであつて、生活の資料を得るための仕事は第二段的のものである。生命とお金と較べて見てその何れが大切であるかと言へば勿論生命であります。お金はどこまで行つても人間のためのお金であります。この意味から言へば女性の使命が主であり、男性の仕事は従的のものであるとも言へるのであります。斯う云ふことを申しますと私が實際家庭にあつて、女性中心の考へをもつて、女が主であつて男は従的存在だと言つて意張つて居るやうにお考へになる方があるかも知れませんが、實際は夫に對しても子供に對しても優しい妻であり、母であり、祖母であるの家に歸りますと孫が五人居ります。

『おばあちゃん象ごつこするのだから象におなり、ちいちゃんはお犬におなり』と言はれますとハイ／＼と言つて子供のためには象にもなり河馬

『あなた家の母さんはお家でおとなしいかい』と聞かれたさうですが、これは私が斯うして講演をして歩き、女性は社會生活の中心であり、男性は従的の存在であると云ふやうなことを申しますので家ではさだめし女主人で意張つて居るのであらうと想像されるのであります。が、私は斯うして講演をして歩き、女性中心は在來の女權主義者の唱へて居る主義主張とは違ふのであります。母心から出發したやさしい母性としての家庭的存値の強さと、その重要性を強調して居るのであります。ですから此點誤解のないやうにお願ひ致します。

つまり長い間女性の生活と云ふものは尊敬されなかつたそこで女權主義運動が起り今迄の不合理な差別待遇を撤廃しろ、男と同じやうに參政権を與へよ、法律を改正しろと云ふやうな叫びが起つて來たのであります。が、私の言ふ女性中心は母心を尊敬せよ、一切の人間社會の進歩の源を爲して居るのは母心であると云ふことであります。

今から何千何百年の昔か分りませぬが、兎に角太古の昔は夫婦關係と云ふものはなかつたのであります。男と女と一緒になる、それ切り別れてしまふ、女の方では何んと云ふ男なのか、何處に住つて居るのか分らない、原始時代の人間の生活は野山に住む動物と變りなく所定めず放浪して歩く、所が女の方では斯うして男性と接觸して妊娠する、子供を産む場所が欲しい、子供が産れば可愛い、それから何百年經つたか知りませぬが、女の産んだ子供が自分の

く、斯うした女性の母心から不完全ながらも掘立小屋のやうなものが出来た、さうしてこれがダン／＼進化して現在建築學の源は、この母性の子供を思ふ母心から始つて居るとも言はれるのであります。

たゞに建築のことのみならず總ての文化の源はこの母性の母心から出發して居ると思ひます。

母と父と子供この三位一體の家庭と云ふものが人間生活進歩の根幹を爲して居るのであります。

すつと昔の人間の生活の状態を見ましても、男は山に狩したり、川や海に漁りして生活の資料を得ることが主な仕事であつたやうです、さうして女は家にあつて子供を育て又男が野山に狩して怪我した場合それを癒す爲にどう云ふ風にしたらいゝか、どんな草の根、木の皮がいゝかとそれを探し當て、治療することを工夫した。

この草根本木皮に據る治療法は現代醫學の源を爲して居るのであります、其他總て現代文化の萌芽はその源を母性愛に發して居るとも言はれると思ひます。

若しこの子供を思ふ母心、母性愛がなかつたならば、人間は未だに昔の儘の野蠻時代の人間と同じやうな生活をして居たかも知れませぬ、この人間生活進化の道程に於て何故に女性が男性の從屬物となり、男性の道具視されるやうになつたかと云ふ點に就いて考へて見ますにその大きな原因としてはダン／＼と人間が存競争が激しくなつて來たことであります。昔のやうにあります。昔のやうにあつちの山際に一軒、こつちの河邊に一軒と云ふやうに人間

なつて來たのであります。この部落と部落との争ひは腕力が必要であり、従つて腕力の強い男性がこれに當る即ち男性の腕力が尊敬されやうになつて來たのであります。

戦争に勝たなければ自分が全滅になつてしまふ、ですからこの時に一番の急務は腕力の強い敵を叩き倒す男性的力です。

部落と部落との衝突が始めて以來強い男の腕力が尊敬され、女の弱い腕は比較的に尊敬されなくなつたのであります。今でも満洲事變や上海事變等のために軍人が非常に人氣があります、今でもさうでありますから昔は猶さうであつたらうと思ひます、さうして腕力全盛時代が長く續いたのであります。

戰國時代の本を見ましても女性が家を思ひ夫を思つて意見を述べますと、『女童の知る所に非ず』と一言の下に押へつけられてしまつたのであります。斯う言つたことが未だに續けられて居るのであります、さうして總てのことが男性中心的に考へられて來たのであります。

例へば一家の中に不幸があつて、お母さんは夢中になつて泣き倒れてしまふ、お母さんの、ほんとに思ひ詰めた會い母心に對して、『何んだ女々しい』と云ふやうなことを言はれる。

この尊い母心の女らしい心の動きを男は、一切合切『女童の知る所ではない』女々しくだらないことだと云ふやうな意味に簡単に片付けられてしまふのであります。

肉體的の有ゆる苦痛を堪へて命をかけて人間の生命維持の保護に當つて居る女性に對して男性が侮蔑的態度で女性を扱ひ輕視することに對して居ります。私は強い憤激を感じて居ります。

而して我々は男性をして、もつと女性に對して尊敬の念をもたせるべく努めなければならぬと思ひます。

若し女性にして貞操觀念がないかつたならば、どうでありますか。ませい、あつちのお妾に子を生ませ、こつちの男と關係して一つの家庭と云ふものは經らないであります。女性は侮蔑され輕視されながらもここまで日本固有の民族性を保護し率ゐて來たのであります。これだけの輝きある女の生活を無視されると云ふことは實に遺憾であります。

我々母性は家庭の爲、國の爲、人類の爲にこの光輝ある女性の仕事を自分自身ではつきりと認識し、さうしてこれが認められなければ、認められるやう努めて參りませう、無視されたから捨てゝ仕舞と云ふことは人類のためにとらぬ所であります。

人間を始めこの自然界に生きとし生けるものは皆太陽の熱と光があつてこそ生きて行けるのであります。

私共の人間社會にも母心と云ふものがあつてこそ初めて進歩があり、平和があり人間としての味はひのある麗しい生活が出来るのであります。例へば一家の中でも極く卑近な例を採つて申上げれば晩餐には何を御馳走しようかと考へます時に普通どこの家でもない、私は天扶羅は嫌ひであるが、子供が好きである、お父さんが好きである、自分を

若し女權主義者の言ふ如く、家庭は女性を幽閉せしむる牢獄なり」と云ふ考への下にて行動されたならば、我國古來の家族制度の美風は影を没するであります。女性の社會的進出結構であります。併しながら家庭を亡じしも總て世の中の仕事は人間の幸福増進のため、よりよきとして、決して仕事のために人間が存在して居るのではないと云ふ考への下に進んで行けば、家庭を離れての女性の社會的進出と云ふことは意義を爲さないものであると云ふことばよく分ると思ふのであります。例へば女權主義的考へによりますと、自分は女教師と云ふ立派な職業をもつて居る白墨持つ手で家庭にあつて、雑巾は持てない、雑巾を持つてはなり、おしめを洗ふことは専等な仕事である現代婦人の爲すべきことではないと云ふやうな考へ方は實に間違つてゐると思ひます。

職業をもち經濟的收入を得ることは、よりよき家庭生活を營むための手段であります。學問も教育もよりよき人間生活を爲さんがためのものであつて、決して學問のための學問、教育のための教育ではないのであります。

最近も武藏野鐵道で女の東掌が馘首されて、之に對して婦人の生活權の侵害だ、女車掌を男と同じやうに扱へと抗議して居たやうであります。併しこれは今の場合己むを得ないことではないかと思ひます。

一生懸命に働いて居るのに

いと思ひます。男は外で働くやうに出来て居る、女には生理的に故障がある、ことの出来ないことがあります。これは賃金取りの生活より無賃金取りの家庭生活、主婦としての生活が上に位するものだと云ふことが判つた時に初めて圓満に解決するものであると思ひます。

白墨を持つ手でおしめを弄ふ、そこに眞の日本女性としての母心の輝きがある、家庭の太陽としての女性の尊さがあると思ふのであります。くどいやうであります、母の仕事が主であると云ふことを繰返して述べて置きます。

斯う申しましても決して世ながらの因襲を守つて、女は家庭に閉ぢこもるものだと云ふ風に誤解されないやうに願ひ致します。この點については後に詳しく述べたいと思います。

過日も婦人運動に携つて居られる、金子しげりさんの離婚問題についていろ／＼とお話をすることがあります、金子さんは九年間も夫と別居して居られた、それが何故に今になつて裁判沙汰にまでしなければならなくなつたかと云ひますと、やはりそこには母性愛の動きがあつたのであります。

金子さんが言はれるに『私は無論離婚を望んで居て離婚したいから九年間も別居して居たのだ併し今まで法律上の手続きを執らなかつたのは、一人子の金太郎の母としての心の動きがそれをさせなかつた』と話されました、當時の新聞記事は少し違つて居たやうなのは、未だに

離れてくない、子供の世話をさせてくれと要求された心には同情すべきものがあると思ひます、勿論この金子さんの申出に對して先方では子供は父親に附くべきものだとふ日本の法律を楯にとつてして應じないのですか、やむを得ず訴訟手續を執らたと言ふ譯であります。私は金子さんの母心の動に對して斯う言つたのであります。

「あなたがどうしても子供離れたくないと言ふ強い心の動きがあるのでしたら裁判所に行つてどこまでもそのとを主張なさい、あなたは今日まで女性の向上と言ふことを目標として運動されて來るのでありますからこの際母権の確立と言ふ意味に於て裁判所でどこまでも主張なさい」と言ひますと、でも山田さう言ふ事を裁判所で取上げられませうかと言はれまことに、裁判所側がそれは認めてくれる、くれないのは別にして母権確立と言ふ建前からいへば最も斯うした強い母性の叫びは婦人向上運動の捨石となりませう、あなたの斯うした強い主張を契機として答へて、裁判所側がそれを認められるとも斯うした強い母性の叫びがあれば終ひには裁判所上又は社会制度上之れを認めなければならぬやうになりますから此際是非あなたの爲又可愛いい子供さんの爲、全日本の女性の爲母権確立のための捨石としてどこまで主張なさいと云ふことを話したことがあります。(つづく)



# 五日の本會理事會總會

## 教育會館と事務所移動問題の行進曲

踊れ!! 友松會

(日七廿月七年八和昭) (可認物便郵種三第)

五日の理事會は、新會長の務所を友松會館へと謂ふこと選舉と、豫算、決算と新事業の意見交換を主なお膳立としてゐたが、何と言つても當てはつたものは教育會事務所と教育會館問題であつた。事務所問題は數年前からのこと會館は前回の引續きとして忘れられずに再燃したのは頼母しく思はれた。

### 二つの對立説

會館建設問題は姑く指いて

便否は論外

前回の時には

友松會館は「不便だ」とかで不賛成した向もあつたとか、凡そ便否をいふには基本があらう、何をか基本らしい根據として便否をみたのか、電信、電話、電車、自動車の中だ、二里や三里の相違は今日の大都會にとつては便否の問題ではあるまい、假令不便であつたとしても、節約のためなら我慢も出来ようではないか。

小田原第一小學校に於ける

自治教育の施設

五年八月十九日には武藏國多摩郡のうち中野外三十

一村を分割して東京府に移管された。その部分は後

豊島郡と合して豊多摩郡となり、本縣所屬の分は南

多摩、西多摩、東多摩の三郡に分かたれた。一口に

これを三多摩と唱へ、政黨の勃興するに及んでは三

多摩壯士の名を斯界に鳴らしたものだ。更に明治九

年四月十八日足柄縣廢せられて其内の相模國足柄上

下、大住、濱綾、愛甲の五郡は本縣に編入され後明治二十六年四月三多摩が東京府の管轄に移りそして今日の神奈川縣の區域が定まるこゝなつた。

多摩壯士の名を斯界に鳴らしたものだ。更に明治九

年四月十八日足柄縣廢せられて其内の相模國足柄上

下、大住、濱綾、愛甲の五郡は本縣に編入され後明

治二十六年四月三多摩が東京府の管轄に移りそして

今日の神奈川縣の區域が定まるこゝなつた。

多摩壯士の名を斯界に鳴らしたものだ。更に明治九

年四月十八日足柄縣廢せられて其内の相模國足柄上

下、大住、濱綾、愛甲の五郡は本縣に編入され後明

治二十六年四月三多摩が東京府の管轄に



## 武相俳壇

## 太眞堂滄洲宗匠撰

秀逸

忠魂の碑に照り添ふや百日紅  
百日紅名利の名にふさはしく  
大いなる蟻通ひけり猿滑  
今日も亦同じ顔あり泳かな  
空に動く暁色の海を泳ぎけり

## 五客

鎌倉  
足柄上  
大磯  
同沼  
波

高座  
同  
高座  
見  
翠

竹居  
多賀

竹居  
翠

同  
波

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠

山  
翠